

北國新聞創刊130年記念 東京富士美術館所蔵 東西近代絵画名品展



ピエール＝オーギュスト・ルノワール《赤い服の女》1892年頃
©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom
—「東西近代絵画名品展」より—

■ 前田利為のコレクション【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 古九谷とその展開【古美術】

■ 四季の移ろいⅣ【近現代工芸】

■ 近代の木版画【近現代版画】

■ みんなで楽しむ美術館
よく見てみつけ！【近現代絵画・彫刻・工芸】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- バスツアー報告
- 8月の行事予定
- 学芸室の人々
- アラカルト ただいま展示中

企画展(第7・8・9展示室)北國新聞創刊130年記念 東京富士美術館所蔵 東西近代絵画名品展

主催／北國新聞社、石川県立美術館 企画協力 東京富士美術館

後援／石川県、金沢市、一般財団法人石川県芸術文化協会、北陸放送、テレビ金沢、金沢ケーブル、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななほ

7月28日(金)～8月27日(日) 会期中無休

東京富士美術館は1983年に設立された美術館で、古今東西のさまざまなジャンルの作品約3万点を収蔵する、日本を代表する美術館の一つです。

本展覧会は、同コレクションより、19・20世紀の西洋絵画と日本画の名品59点をあわせて展覧するものです。

19世紀に入ると、風景そのものが絵画の主題となり、また野外制作が行われるようになったことから、西洋風景画は大きな変革を迎えます。本展では、クールベらの写実主義、コロ、ミレーらのバルビゾン派、モネ、ルノワールらの印象派、セザンヌ、ゴーガンらの後期印象派と続く、西洋における近代絵画の流れをたどるのにふさわしい、21作家31点が展示されます。なかでもモネ3点とルノワール2点の同時陳列は、至福の鑑賞のひとつを提供するものでしょう。

一方、明治期以降の日本では、西洋文明の受容のなかで「日本画」という概念が形成されます。本展では、「近代日本画の育ての親」とも呼ばれた橋本雅邦、その指導を受けた横山大観や、下村観山、菱田春草、京都画壇における重鎮の竹内栖鳳、近年再評価が目覚ましい渡辺省亭など、精選された12作家14点の秀作が並びます。

そして、吉田博、川瀬巴水の「新版画」を紹介します。浮世絵の伝統を受け継ぎつつも、西洋の遠近法、陰影法等を巧みに取り入れた両者の作品は国外でも高い評価を受け、なかでも吉田博《瀬戸内海集 光る海》は、故ダイアナ元英国皇太子妃が執務室に飾っていたことでも知られています。

本展が、西洋・日本の近代絵画のそれぞれの魅力を感じ、東西の「美の競演」を存分に楽しんでいただける機会となれば幸いです。

◆入場料

一般	1,300円(1000円)
中高生	900円(600円)
小学生	700円(400円)

※小学生未満入場無料

※()内は20名以上の団体

※次の方は団体料金でご覧いただけます。(会場受付にて証明となるものを提示の上、ご購入ください。)

- ・当館のコレクション展チケットをお持ちの方
- ・当館友の会会員証を所持する方
- ・石川県立歴史博物館、石川県輪島漆芸美術館、石川県七尾美術館、石川県九谷焼美術館、石川県能登島ガラス美術館、金沢21世紀美術館友の会会員証を所持する方
- ・身体障がい者手帳又は療育手帳又は精神障がい者保健福祉手帳を所持する方及びその付添者(1名まで)

◆お問合せ

北國新聞社事業局

電話 076-260-3581

〈受付時間10時～18時〉



吉田博《瀬戸内海集 光る海》大正15年(1926)
©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom



竹内栖鳳《獅子》(右隻)明治34-35年(1901-02)
©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

古九谷とその展開

7月29日(土)～9月11日(月) 会期中無休

令和3年に開催した「加賀百万石 文武の誉れ」展では、加賀藩3代藩主・前田利常が推進した古九谷の制作を、江戸幕府による禁教の状況下で、キリスト教信仰が日本・東洋文化と高度に融合した文化的所産として再考しました。文武二道の精神から、利常は江戸幕府に対して文化力で挑みました。そこで古今東西の名品の収集や、名工の招致・支援に続いて着手された古九谷のプロジェクトには、江戸では生産できない色絵磁器という日本では新しい芸術ジャンルであることに加えて、大胆かつ斬新な様式に、美しさと深い思想的な含蓄があることに戦略的な意思が示されています。

1637年に、佐賀藩は有田から日本人陶工826人を追放しています。日本人のみを追放した理由

は、キリスト教信仰者の排除だったと考えられます。その年、利常は長崎、平戸に御買手を派遣して、「古き唐織の切」(名物裂)や茶道具の購入にあたらせています。その際に、追放されたキリシタン陶工とも接触し、色絵磁器生産の技術を導入する道筋が付けられたと推測されます。近年、色絵磁器に用いられた顔料の科学分析から、すでに1630年代から、来日したイエズス会宣教師を中心として、ヨーロッパ由来の顔料を用いた色絵磁器の開発が行われていたと見る見解も出されています。そこで「マリア観音」の進化形として、東西のモチーフに共通する属性を基盤とした、暗示的なキリスト教信仰記憶媒体が、高山右近ゆかりの加賀藩で構想されたことは十分考えられます。



石川県指定文化財《色絵鳳凰図平鉢 古九谷》

前田利為のコレクション

7月29日(土)～9月11日(月) 会期中無休

前田利為によって、今日の前田育徳会にあたる「公益法人 育徳財団」が設立されて、令和8年(2026)で百年を迎えます。前田家16代当主利為は、旧七日市藩12代利昭の五男として明治18年(1885)に生まれ、明治33年(1900)に前田家15代利嗣の養子となり、利嗣逝去ののち、家督を嗣ぎました。

利嗣の娘漢子と結婚した利為の最初の責務は、利嗣の遺志でもある明治天皇の行幸を仰ぐべく、本郷邸を新築することでした。当時、旧大名家はこぞって西洋式の邸宅を新築して天皇を迎えており、華族にとって家格を示す重大事業だったのです。本郷邸の新築は、日露戦争によって一時中断しますが、西洋館は明治40年(1907)12月に、日本館はその2年前に竣工しました。

西洋館は、列柱とアーチをもつ広いバルコニーを備えた玄関で、豪華なルネサンス風の建物でした。利為は、竣工したあとも西洋館は使用せず、行幸決定の内示を受けて、西洋館の装飾を始めます。タイミングよく、パリで美術商として活躍した故林忠正のコレクションの一部を明治42年(1909)に入手します。

今特集で紹介する《中古市街ノ風俗ノ図》(ジャン・デュモン)、《牧場図》(ヴィオレル・デュック)、《森林群犬図》(フェデリコ・ロッサーノ)は、この時購入したものです。本特集ではその他、行幸の様子を描いた下村観山による《臨幸画卷》のほか、昭和2年(1927)の4度目の渡欧にて入手したルノワール《アネモネ》を紹介します。



《前田利為肖像画》ウンペール

近現代版画(第3展示室)

近代の木版画

7月29日(土)~9月11日(月) 会期中無休

明治に入り西洋印刷術が導入されると、木版画である浮世絵は、時代を写す鏡という一大メディアの座を奪われていきました。しかし、近代の木版画はその頃まだ多くいた彫師・摺師の名工たちを擁して、明治時代の新たな分野の「口絵」や大正時代の「新版画」などの新たな舞台を得ました。

口絵は文芸雑誌や小説単行本の巻頭に付けられ、明治時代に刊行された近代文学は、口絵によってその小説なりの世界を導くためのビジュアル・イメージの役割を務め、大衆の関心を集めたのでした。口絵の花形は美人画でしたが、当初小説に付随するものであった口絵が、次第に小説から完全に独立して美人画に特化していきました。この口絵のブームは明治中期から大正初期の30年間ほどで終わりますが、近代の木版画は伝統派の錦木清方門下の伊東深水、そして、風景画では川瀬巴水といった画家たちの大

正・昭和の近代美を備えた新版画へと受け継がれていきます。

新版画の中でもっとも制作されたジャンルは風景画です。葛飾北斎や歌川広重によって浮世絵で名所を描くことが定着し、明治初期には小林清親によって季節や天候、1日の移ろいを光と影の関係によって表現し、木版画における風景表現の近代化が図られました。この後、明治20~30年代にかけては美的評価が定着した名所ではなく、個人の主観によって選ばれた無名の自然景を描くことが普及、戸外での写生や水彩画ブームと共に新版画の風景画に大きな影響を与えました。そして、この時代の浪漫主義の文学や絵画など、次々に到来した西欧の新しい自由な芸術観によって、それぞれの個性尊重の考えから作風のヴァリエーションが広がり、近代の絵画表現をさらに豊かにしていったのでした。



錦木清方《花吹雪》

近現代工芸(第5展示室)

四季の移ろいⅣ

7月29日(土)~9月11日(月) 会期中無休

今年度コレクション第5展示室では四季の移ろいⅠ~Ⅳと題して、共通としたタイトルから、さまざまな切り口で展示をお届けしています。Ⅳでは「夏さんぽ 秋さんぽ」をテーマに、夏から秋にかけて身近に見られる風景から、美しいみのりなどを楽しめる作品を集めました。

入り口右手から、雨上がり、大地が染まる青と白い雲に、凜とした空気が感じられるところに優しい色合いでかかる虹が深く印象に残る、堀友三郎《虹の立つ丘》でスタートします。この作品はパネル作品ですが、今回壁面ケースには着物6点、パネル2点、屏風1点と皆様から展示のご要望が増えている着物を多く展示しました。着物の中から1点、金丸水明《服

飾「盛夏果实」》は、逆光に映える青りんごを、実の部分には藍と黄の補色を使い夏の光を感じさせ、樹や葉などは藍の濃淡で表現することで、夏のさわやかさをより印象深く感じる仕上がりとなっています。また、実にある黄色によって、麻地の地色をそのまま背景として使用しても、模様と地とが強く割れてしまうことなく、逆にすがすがしさを残し、夏をそのまま感じる作品です。そして今回、一番奥には稲穂がみのり、穂のなかを鳥が飛ぶところで遊ぶ子どもたちを表現した木村雨山《遊童図》を展示します。

夏休みにも当たるこの時期、美術館でさんぽがてら、ゆっくりぶらぶらと鑑賞を楽しんでいただきたいと思います。



金丸水明《服飾「盛夏果实」》

みんなで楽しむ美術館 よく見てみつけ！

7月29日(土)～9月11日(月) 会期中無休

学芸員の眼

今回の展示では、第2章「内側を見てみつけ！」の作品選定に大変苦心しました。ふたの付いた作品や内側にも装飾が施された作品は数あるのですが、それだけではイマイチひねりが足りないような気がしてなりません。そんな時、先輩学芸員から園児たちが末政哲夫の作品を鑑賞していたときのお話を伺いました。彼らはしゃがんだり背伸びをしたりして、内側に写った自分や友人の姿を見て楽しんでいましたそうです。「鑑賞者が作品と一緒に楽しくするのも、美術鑑賞の面白さなのではないか」、そんな思いから《正三角形の内と外》と《天窓の上の獅子座》を展示することに決めました。本展では、ぜひ童心に帰って作品との対話を楽しんでいただければ幸いです。



末政哲夫《天窓の上の獅子座》



末政哲夫《正三角形の内と外》

夏の恒例コレクション展「みんなで楽しむ美術館」は、当館によく親しんでいただいている方はもちろん、美術館が初めてのお子さんや美術鑑賞に慣れない方など、様々な方に作品を楽しんでいただく機会としています。

本展は、鑑賞の基本である「よく見る」ことを楽しんでいただくため、「探す」「内側を見る」「くらべる」という3つの見方を提案します。作品をじっくり見て、新たな発見をする機会となれば幸いです。

第1章「探してみつけ！」では、各作品に設けられたお題を作品のなかから探していただきます。作品に目を凝らすだけでなく、遠くから全体を眺めるなど、「探す」ことを通して様々な見方にチャレンジ

していきましょう。

第2章「内側を見てみつけ！」では、外と内で異なる表情を見せる作品を集めました。ふたをとったり、のぞき込んだりすることで、作品の外と内の組み合わせの妙を味わってみましょう。

第3章「くらべてみつけ！」では、2つの作品を比較して同じところ・違うところを見つけてみましょう。実は、ここで「くらべる」作品は、同じ展示室にあるとは限りません。館内の異なる展示室にある作品や街中の彫刻作品が「くらべる」対象になっていることもあります。見慣れた風景であっても、作品に注目すると違った雰囲気に見えるかもしれません。ぜひ足を運んでみませんか。



梶山伸《名図譜》

友の会 第21回バスツアー報告 「所蔵作家の工房と 金彩をめぐる」

令和5年5月27日(土)実施

近現代絵画・彫刻(第4展示室)

優品選

7月29日(土)～9月11日(月) 会期中無休

第3展示室、油彩画分野では明治から終戦までの作品を集めました。宮本三郎《赤いクッション》は、着物をはおり、赤いクッションにもたれる裸婦を描きます。このころ宮本は浮世絵や安井曾太郎の影響を受け、日本的な表現を意識した制作を行いました。本作でも、形態を簡略化し明るい色彩を用いて、近代的で装飾的な画面を作り上げています。昭和10年代の宮本の特徴をよく表した作品です。

第4展示室、彫刻分野からは昨年度新収蔵となった作品を紹介します。得能節朗《豊穣の祈り》はメソアメリカ文明に伝わる「チャクモール」に裸婦を組み合わせた作品。チャクモールとは儀式の際に生贄を

ささげる像のことを言います。本作は、作者がメキシコなどを旅行した際に着想を得て制作したといえます。胸に手をあてた裸婦が腰掛けた姿と異国の像の組み合わせが神秘的な作品です。

日本画分野からは、稲元実《夏日》を紹介합니다。画中の男女は作者とその妻。鑑賞者に向けられた2人の視線や姿勢はしどけなく、夏雲を想起する白と、枯れかかった向日葵を配した背景とが相俟って、やや暗い印象を醸します。画題の「夏日」は、過ぎ去るひと夏の1日でもあり、人生の盛夏が永遠に続かないことを暗示するかのようです。今回の日本画は第6展示室ではなく、第4展示室でご覧ください。

初夏のきらめくような青空の下で開催した、第21回バスツアーをご報告いたします。

今回は、「所蔵作家の工房と金彩をめぐる」と題し、企画展「陰翳のなかの金彩」に関連したバスツアーでした。本展に出展中の作家の工房と金彩にまつわる施設を巡りました。

まずは、人間国宝・吉田美統氏の工房である錦山窯とギャラリー・撫旦を、錦山窯4代の吉田幸央氏のご案内で見学しました。実際に職人の方が作業する様子や錦山窯で生み出された多くの作品を見て、その技術への理解を深めました。

午後は、赤絵細描の福島武山氏の工房へ。福島氏のご厚意で九谷焼の名工・斎田道開を祀る陶祖神社を参拝し、本殿内を見せていただきました。その後、福島氏

とご息女で弟子の福島礼子氏の案内とともに、実際に作業されている様子を見学しました。近年の作品を間近で見ることができ、大変細かな表現に驚きました。

また、金沢市立安江金箔工芸館では、副館長から金箔の製造工程に関するご説明をいただいた後、常設展と企画展「春を彩る美術工芸」を鑑賞しました。

最後は、石川県立美術館にて企画展「陰翳のなかの金彩」を担当学芸員の解説を聞きながら鑑賞し、自由解散となりました。

皆様のご協力もあり今回も大きなトラブルなく、無事終えることができました。ご参加いただき、誠にありがとうございました。今後も楽しんでいただけるイベントを企画していきます。皆様のご参加をお待ちしております！



錦山窯にて



稲元実《夏日》

8月の行事予定

〈コレクション展「みんなで楽しむ美術館 よく見てみつけ！」関連行事〉
わくわくわーくしーと

*展覧会会期中、展示をもっと楽しく鑑賞できるワークシート「わくわくわーくしーと」を無料で配布いたします。今回は展示室を飛び出して、美術館内や金沢市内に設置された作品に注目した内容です。子どもはもちろん、大人も楽しめますので、ぜひお楽しみに！

「#野外彫刻みつけ！」で写真投稿

*お気に入りの野外彫刻を見つけて、SNSで投稿してください。素敵な作品やこだわりのアングルなど、個性あふれる投稿をお待ちしております！投稿いただいた写真およびコメントは、館内で順次掲示予定です。

参加方法…

①石川県立美術館のTwitterアカウント (@shikawapremus) もしくはFacebookアカウントをフォロー。

②お気に入りの野外彫刻を撮影した写真に、一言コメントを添えて、ハッシュタグ「#野外彫刻みつけ！」をつけて投稿。

受付期間…7月29日(土)～9月8日(金)

注意事項…

- ・投稿および掲示する写真は野外彫刻を撮影したものに限りです。
- ・本プログラムの野外彫刻とは、屋外の公共空間に恒常的に設置された美術作品を指します。
- ・撮影の際は、他の鑑賞者等の写り込みにご注意ください。肖像権にふれる可能性があります。
- ・肖像権その他にふれる場合、掲示の対象外とさせていただきます。



〈ワークシヨップ〉

美術館でスケッチGO！

*磁気式お絵かきボードを使って、コレクション展示室の作品をスケッチします。大人も子どもも親子でも！できあがったスケッチは、記念撮影できます！

日時…8月27日(日) 10時～11時30分 (所要時間…約30分)

※申込不要、時間内は随時受付しています。

場所…2階コレクション展示室付近

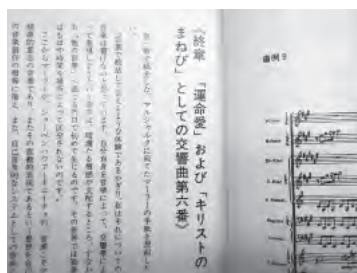
対象…どなたでも

料金…要コレクション展観覧料(参加者は団体料金、高校生以下無料)

学芸室の人々

村瀬博春(修復工房担当課長)

カラヤン+マーラー「悲劇的」Ⅱ宗達《風神雷神図》。20歳の時、宗達の解説に挑戦しました。手懸りを摸索していた時、カラヤン指揮のベルリン・フィル来日公演を聴きました。当時マーラーの交響曲第6番「悲劇的」は不人気で、会場は半分以下の入りでした。しかしカラヤンは、バツハからブルックナーに至る複音楽を凝縮したこの大曲を力演しました。長大な終楽章でハンマーの一撃に達した時、臨済の言葉が閃きました。そこで《風神雷神図》は禅思想の体系だと直観しました。絵画鑑賞で楽曲解釈を構想したカラヤンの演奏がプリズムとなって、宗達を解凍するアプローチが啓示されました。



拙論「グスタフ・マーラー自己言及的システムとしての音楽」
当館『紀要』10号所収

《色絵亀甲菊流水図平鉢 古九谷》いろえきっこうきくりゅうすいすひらばち こくたに

口径45.5 底径21.8 高10.1cm
江戸 17世紀

見込を亀甲型で整然と分割し、中央には菊と流水、そしてそれを鶴と牡丹を交互に配して囲んでいます。菊水に鶴と亀そして牡丹から、長寿、延命、富貴を含意した意匠構成であることがわかります。それを強調するように、裏面には紫と青によって牡丹唐草文が描かれています。3ページでも触れましたが、加賀藩3代藩主・前田利常は1637年に長崎、平戸に御買手を派遣して名物裂や茶道具の購入にあたらせています。このことと古九谷プロジェクトが深く関連していたと考えられるのは、古九谷の伝世品に名物裂から意匠を得たものが数多くあるからです。本作も亀甲をつなぐ意匠構成や、表裏に描かれた牡丹の表現に、名物裂の影響が認められます。

有田を追放されたキリシタン陶工は、長崎周辺で生活の糧を得る手段を模索していったことでしょう。そこに藩主の意向で町人に変装して、名物裂を買い漁る加賀藩士が接触し、藩主の色絵プロジェクトへの協力を打診したとの状況を考えると、色絵磁器という新たな美術ジャンルに、藩主の圧倒的な名物裂コレクションから意匠を取材した背景を理解することができます。つまり、技術と美意識が志向しているのは藩主による文化政策の卓越性で、ここに古九谷の戦略的特質が表れています。さらに本作の高台中央の銘は、天地神明の助けを意味する「祐」となっている事実も、意匠が含意する「永遠の生命」の深意を示唆するものとして注目されます。

次回の展覧会

令和5年9月16日(土)
～10月22日(日)
会期中無休

第5展示室	第4展示室	第3展示室	第6展示室
模様を楽しむ 【工芸】	Rey Camoy —鴨居玲 晩年の肖像 【油彩画】	モダン 近代逍遥 【近現代絵画・彫刻】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
前田家の至宝 I	茶道美術名品展 I

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
8月7日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

8月は無休で開館しています

「石川県立美術館だより」に広告を掲載してPR

広報紙広告ならではの
メリット

他エリア自治体広告もお任せください！
092-716-1401

地域に根ざした
情報発信

石川県での
知名度向上

自治体発行の
信頼度の高い
広報媒体

サービス・集客
しませんか？

株式会社
ジチタイアド

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG 薬院ビル7F
※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。

石川県立美術館だより
第478号(毎月発行)
2023年8月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。